

# 思 い で

本学学頭室 住 一 妙

つゝしんで偲びます。なつかしいお人でした。我々にとつても身延にとつても。

こゝにわがまゝな批評などしては失礼ですが、卒直に思いでを少々、しるさせていただきます。松木先生は華やかさはないようですが、まことに老松の感じびつたりの頼もしいなつかしい人でした。お若い時分の一面は、私よく存じませんが、中年から晩年までの二、三十年、なにかとお世話になつて参りましたが、性来頭のにぶい私のことではピンとどともいえるものは、大しておぼえてはおりません。たゞ職員会議や懇親会など、いつも塩田先生と並んで上座に端坐、あたりをヘイゲイしておられました。ことに眼鏡のきらめきさえも、あの先生全体の姿勢やお面つきから鋭い光りとして、睨まれておるように、私には感じました。

あの方はたしか弁の人とはいへ、そんな軽い感じのない人です。つまり饒舌駄弁型ではない。大雄弁ではないが、限られた人と場所で限られた内容のお説教、きたえられみがかれた話しぶりですから、大ていの御挨拶はそれ／＼の名調子、一句一語、ゆるがせにしないというしまりは厳しかったようです。これもやはり一朝一夕にはできない、永年の鍛錬のせいでしょう。直接によくお聞きしたことです。先生が学校御卒業後に肺を病んで医師にも見放されて一念奮起、単身北海道にわたつて街頭布教、五十年前の北海道での辻説法です。この絶叫が悪血を吐き、この獅子吼が全身をきたえたのでしょう。

爾來、布教界に席あたたまりとまなく、一生東奔西走されるに到ったのも、一点この信念・御報恩への情熱なのでした。肉身のふるさと、魂の故郷、身延のため、御本山を守りたて、代々の法主猊下のお伴して御親教の奉仕、全国にふらしたこの法雨は、良い意味での「またも袖ぬらす松の下露」なのでした。いわゆる大衆をうならす繰弁型でなく、身延山を奉ずる重々しい儀式から発するのですから、こゝは全く先生独自の風格だったようです。幾度か拝聴させていただきました、あの祖師堂の朝説、御大会毎の御代講。いつきいてもすがすがしい。話しにむだのない、そつのない、すゝめ方しめ方、あとあちを残さぬ淡々さのうちに、ほのぼのと魂にふれるものを与えられました。先生にとっても、むしろ高座に登ること自体が、この上ない法悦のようでした。晩年、「みのぶ」教報誌上、連載された「身延のお祖師様」というものは、先生の円熟し来た信仰の、純情の半面でしょう。

最近、ふと、学校のロッカーに、本学創立五十周年記念講演のテープをみつめましたので早速かけてみました。あの当時私もきいていましたが、新ためて思い出します。聴衆は内の学生、町の人々、場所は町の映画館でした。生れも育ちも身延、学校も奉職も身延山、身延の二字で終始してきた生涯のなつかしさが精一ばい、草稿を越えた弁舌はムードにのり企まざる巧みさである。御自分で、「これはライススカラーのような話」とはまた評し得た結びです。御本人のなつかしき、本学の因縁といふ内容といふ、このテープは記念として永く残しておきたいと思えます。

たった一つ、ごく私的事をのしっておきます。そう古くはない十年ほど前、職員会のとき、どんなすぢで、けんかになったのか、どうも思い出せませんが、ののしられた一語、こきちがいといひみです。その席はアルも入っていたようで、お互いがいきりたった上のこと、私も立ち上り、何かののしりかえしたようです。今から思えば汗顔至極、はるか仰いで祥雲院様におわび申す次第ですが、実はそのことばは怨執のような意識の底にひそめられてき

たこともたしかです。

しかし、そういわれる実体は何かということがこのころになってやっと気づきました。即ち正常さにまで至らないその距離のこと。なるほど明哲保身の先生からみると、この泥くさい至らなさが、まことに以て慣らしいほどのものもどかしさだったのでしょう。私が、偶然刊行させられた「日蓮大聖人と俱に」の本の結びとして、この一句八字の表題をよんだ詩の中に、「賢明さよりも正常さ、正常さよりも誠実さ」とねがうてきた私の長短の一癖が、その実体だったので。そう思うと、やはり松木先生の眼光はするどいものとの頃に思います。 合掌。 (43、6、6)

## 松木本興師を追悼す

遠 藤 是 妙

### 一、師の学生時代

師の学歴等は法主猊下歎徳文にも明かでありますから全部省きまして、私の知って居る部分を少しばかり述べることに致します。私が大崎の大学を卒へて、二三年お手伝いした後、大正二年三月身延山に帰りました当時、貞松以来御愛顧の関係もあって、直に日慈猊下大奥隨身長として今の主事室に入りました。